コーヒーと SDGs

ボルカフェ株式会社

コーヒーのサスティナビリティーと SDGs

SDGs が世界共通の用語となる以前、コーヒー業界では、サスティナビリティーという言葉が知られていました。そのサスティナビリティーについての意識は、コーヒー原料豆の供給の持続可能性についてのものであり、現在の SDGs がカバーするような広い意味でのサスティナビリティーを目標とするものではありませんでした。また、サスティナビリティーを商品販促のためのキーワードとして利用する傾向があったことも否定できません。そしてこれからは、コーヒー業界が本当の意味で SDGs の実現のために果たす役割が意識されるべき時代となっています。コーヒーの生産、流通、消費が、世界の極めて広汎で多様な地域において、各地の自然環境や社会、政治体制などと密接な関わり合いを持っていることからも、SDGs の達成のためにコーヒー業界が期待される責任は重大なものであることは自明です。

SDGs に照らしたときに浮かび上がる現在のコーヒー産業の存在はどのようなものでしょうか。 それを理解するために、先ず、敢えてネガティブな側面を見てみます。

コーヒーはいわゆる不要不急の飲み物です。よほどのカフェイン中毒でもない限りコーヒーを飲まなくても日々の生活にはさほど困りませんし、国産のお茶でカフェインは取れます。

コーヒーは、ほとんど全て輸入原料です。最大の生産国ブラジルは地球の裏側にあり、輸送のために多量の CO₂ を発生させています。

コーヒーの価格は、開発途上国の安い労働力や低い生活水準に支えられて今のレベルが保たれています。 コーヒーの生産適地の多くは、非常に自然が豊かで生物多様性の宝庫です。コーヒー農園の拡大は、その ような豊かな自然に大きな影響を与えます。

つまり、乱暴に拙速な結論を出してしまうと、SDGsの達成のためには、コーヒーの生産や流通は止めてしまった方が良いということになります。現在コーヒーを生産して生活している農家にしても、世界の市場価格に左右され不安定な収入しか保証してくれないコーヒーの生産などはやめてしまい、自家消費用の農産物や、地産地消できる現金作物に転作してしまった方が良いのかもしれません。

しかし、このようなネガティブな側面は、コーヒー産業が SDGs の実現のために寄与することができる ポジティブな側面と表裏一体の関係にあります。

ここからは、そのポジティブな側面を見るために、コーヒー原料の生産や流通の現場や周辺社会で、SDGs の 17 の目標のそれぞれが、どのような関連や影響を持つのか、目標実現のための課題、取り組みの実例 や可能性などを見ていきたいと思います。

SDGs の 17 項目とコーヒー

SDGs は 17 のゴール(目標)と、それを達成するための 169 のターゲット、その達成度合いを測るための 232 の指標からなっています。 17 のゴールは、下記の「5 つの P」にグループ分けをすることできます。

- 人間 (People) のゴール、1~6
- 繁栄 (Prosperity) のゴール、7~11
- 地球 (Planet) のゴール、12~15
- 平和 (Peace) のゴール、16
- パートナーシップ (Partnership) のゴール、17

当然のことですが、SDGs の目標はお互いに関係しており、どれ一つとして単独では達成されません。 SDGs に向けての取り組みは、それが本当にインパクトがある取り組みであればあるほど、自然に、複数 の目標の達成につながっていきます。

コーヒー業界における取り組みも、同時に複数の目標を見据えて進められるべきものですが、ここでは、 それぞれ最も直接的に関係すると思われる項目に関連付けて説明していきます。

① 貧困をなくそうあらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる

SGDs の前身である MDGs (ミレニアム開発目標)の中心的な目標であり、これまでに一定の改善が達成されているものです。しかし、私たちがコーヒーの生産地を訪問した時に実感するのは、未だにはびこる貧困であり経済格差です。コーヒー生産の多くを安い労働力に頼っているコーヒー産業であるだけに、この目標は私たちに強い関与意識を持たせるものです。



コーヒー生産地における貧困に直面している恐れのある人たちは二つのタイプに分けて考えることができます。

一つは、コーヒー農園で賃金労働に従事する人たちであり、もう一つは自作する中小農家です。

25年程前のコーヒー農園の労働者の状況と現在の状況では、かなり改善がなされているように見えます。これには、各農園主の自発的な改善努力ももちろんあったでしょうし、サスティナビリティー認証団体などによる働きかけもインパクトを与えたと考えらえます。しかし、今般の新型コロナの影響などを受けて農園の経営状態の悪化した場合や、コーヒー市場自体の低迷などの際の、農園労働者への影響などを考慮に入れる必要があります。コーヒー生産国の中には、そもそも労働者の最低賃金に関する規定が存在しない国もあります。この点については、私たちがコーヒー原料を買い付ける農園の従業員に対する待遇が公正なものであるかどうかを、買い手の立場から確認、指導していくことが必要です。

貧困の現場として考えられるべき、もう一つ重要なところが、世界のコーヒーの生産の多くの部分を担っている零細農家です。我が社の独自推計では、世界のコーヒー豆の55%程度が5~クタール未満の

小農家により生産されているようです。

零細農家が貧困に陥ってしまう原因の一つに、その農園規模の小ささ自体が挙げられます。家族の生活を維持するのに必要な現金収入を生み出すことができない規模の農園が多くみられ、ただでさえ小さい農地を子供に分割相続するようなケースもあります。スペシャルティーコーヒーの最高級ブランドであるイルガチェッフェの生産地区などでもそのような傾向があり、世界に冠たる最高級コーヒーの生産者が貧困にあえぐといった皮肉な状態を生み出しています。



ルワンダの多品種栽培

この様な社会構造的な問題は、現地政府が取り組むべき課題で

すが、私たち民間業者としては、下記のような点を踏まえた取り組みの可能性があります。

- コーヒーが生み出す現金収入のみに頼らないよう、自家消費作物などの栽培や、コーヒー以外の 現金収入の柱となる仕事も得るよう奨励する。
- そのような作物を栽培する耕地を確保できるよう、コーヒーの面積当たりの生産量と品質を上げるよう援助する。
- ニューヨーク(ICE)市場等の汎用品取引価格により、販売価格が翻弄されないようにコーヒーの品質の個性化を意識し、個性のあるコーヒーの価値を踏まえた適正な価格で買い付ける商流を構築する。

凡庸で差別化に堪える品質のコーヒーを生産する可能性のない地区で、不用意にコーヒー栽培を奨励し、 結果として農家が不安定な汎用品市場に生活を依存してしまうという事態を起こさないかどうかには十 分注意が必要です。

② 飢餓をゼロに - 飢餓を終わらせ、食料安定保証および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する

これは1の目標とも重なります。自家消費作物の栽培の奨励などは、まさにこの目標のためのものでもあります。先にイルガチェッフェ地方の事例を挙げましたが、イルガチェッフェと対極にある同国でも最も安いグレードを生産しているジマー地方のある農家が、思いの外豊かな生活をしていることが印象的で



す。その農家のコーヒー農園は数へクタール程度の規模である程度の現金収入を生み出す上、自家で家 畜、養蜂、野菜の生産などもしており、子供たちも近隣の学校にしっかりと通っています。

比較的コーヒー生産の歴史の浅いパプアニューギニアでは、伝統的に、換金作物に生活を依存させるという習慣が希薄なようで、肥沃な土地が生み出すイモ類や家畜の豚肉などにより人々の空腹が概ね満たされており、この土地がパラダイスという呼び名で紹介されることの意味が理解されます。

ここまでの 2 つの目標については、主に如何に空腹を満たすのかという側面のみを述べました。最初の目標の一部には、<u>あらゆる形態の</u>貧困を終わられるとあるとおり、貧困とは食に関する貧困だけではありません。それ以外の貧困の側面である教育や健康に関する目標は、別に個別目標として設定されています。

③ すべての人に健康を - あらゆる年齢のすべての人々の健康的な 生活を確保し、福祉を促進する

全日本コーヒー協会が助成しているコーヒー飲用の健康増進効果の研究や啓蒙活動はコーヒーの消費増に貢献し、ひいてはコーヒーを飲むことで実際に健康の維持に役立っている向きも多いと思います。

コーヒー原料を生産している現場では、どうでしょうか。

上質なアラビカコーヒーの多くは山間地で生産されるため、そこに住みコーヒー生産に従事する人々の 医療サービスへのアクセスが課題となっています。 そのため、生産地貢献の一つのオプションとして、 山間地や僻地での診療所開設などの取り組みは有効なものとなります。

また、コーヒー農園で散布される農薬による健康被害を防ぐための講習も実施されています。 これは、 農薬散布に従事する労働者への技術指導のみならず、農薬や化学肥料の適量の使用を指導することで、 農産物への農薬の残留を防ぐことも目標となります。この課題はかならずしも低開発国の生産地だけの ものではなく、実は農薬や化学肥料の使用量の多いコスタリカ、コロンビア、ケニアなど中進国における

課題でもあります。この課題を検討した結果として、短絡的に(生産管理の面でハードルの高い)有機栽培を奨励するのではなく、効率的で無駄のない農薬や化学肥料の使用を考慮した環境保全型農業を指導する取り組みが期待されます。また、コーヒー生豆の流通の実態を見てみますと、壮年男性でも担ぎ上げることが難しい60キロ以上の麻袋が未だに標準の包装として多く流通しています。この前時代的な重量の荷物を手作業で扱うこともある労働者の身体への負担が軽視されていることには疑問を感じざるを得ません。



農薬散布の指導

複合的な要因が関連しあって起こすおこす健康被害のことを示すシンデミック(Syndemic)という言葉があり、全ての項目が関連しているという SDGs への取り組みを検討する際に重要な示唆を与えてくれます。後述 6 の安全な水を確保するという目標が達成されないと、市販されたペットボトル詰めの飲料水より安く上がることのある清涼飲料水への依存が高まり、肥満などの原因となります。この悪循環を止めることを見据えたコーヒー業界としての取り組みがありそうです。

コーヒー飲料をおいしく簡便に提供することにおいて世界の最先端を行く日本のコーヒー業界として、その技術をコーヒー生産国に輸出する取り組みにより、コーヒー生産者が、清涼飲料水の代わりに、砂糖を入れないおいしいコーヒーを飲む習慣を広めることができると思います。そうすれば、コーヒー生産者自身のコーヒーの品質に対する理解も深まり、彼らの生産するコーヒー豆の品質向上にも役立つはずです。コーヒー生産地で、地産地消のコーヒー市場が成熟すれば、コーヒーの国際相場により販売価格が翻弄されるという事態にも耐える事業となりえます。

④ 質の高い教育をみんなに – すべての人に包摂的かつ公平な質の高い教育 を確保し、生涯学習の機会を促進する

この課題には、3の目標と同様に、コーヒー生産地が僻地にあることからくるものと、貧困の結果としての側面があります。

最初の課題克服のための取り組みは、比較的事例が多く、山間地に小学校などの

基礎教育の施設を建設したり、その運営を援助する取り組みが主だったものです。 もう一つの課題は、コーヒー生産者の貧困解消のために、コーヒー農園の生産性と品質アップによる収入の増加を通じて、子供を通学させることができる経済的余裕を与えるという取り組みが有効になります。 ここでは、現金収入の途に乏しい山間地での貴重な換金作物としてのコーヒー生産の意義は大きいものとなります。

質の高い教育を受けさせることができない状況の一つの様態が児童労働です。児童労働を、伝統的習慣であるとして擁護する議論がまれに聞かれますが、SDGs の実現に向けては、すべての人々がそれぞれの立場に於いて、社会的役割を理解できるような素養を持っていることが理想であり、それを妨げる児童労働は決して容認されるものではありません。

児童労働が、伝統的社会的な慣習であることから、それに対する取り組みは、個別の生産者や団体に対して働きかけるのではなく、そのような慣習を共有する地域やコミュニティにターゲットを設定することが有効になると思われます。



質の高い教育を みんなに

ウガンダのコーヒー生産者家族

我が社ウガンダの関係会社では、同国北西部の地方都市に、児童労働防止地区(Child Labor Free Zoon)を設定し、その地区のコーヒー生産者による児童労働を禁止し、子供たちが学校に通えるようにするための援助を行っています。それを実現するためのひとつの柱として、コーヒー生産による収入向上の指導が行われています。

しかし、この目標の実現に伴ってひとつのジレンマが発生します。 高等教育を受けた若者が、大都市や海外での就職を志向し、結果としてコーヒー生産を継承しないケースが多いことです。 この問題の解決のためには、後述の8や9の目標も踏まえた社会構造や市民の意識の変革が必要となります。 新型コロナ禍が、その変革のためのヒントを与えてくれているようにも感じます。

⑤ ジェンダー平等を実現しよう — ジェンダーの平等を達成し、 全ての女性と女の子の能力強化を行う

この目標の採択には、国連における協議でも、加盟国の文化的、宗教的背景の違いにより議論が紛糾したようです。 コーヒー生産国においても女性の置かれた状況は様々です。 中南米などではマチスモと呼ばれる男性優位主義が見られ、女性のコーヒー産業への参加が忌避される地域が多い一方で、ルワンダや



パプアニューギニアなどでは、女性が農園経営にしっかりと携わり、むしろ男性の存在感が薄く感じられる地域もあります。

このような背景を踏まえて女性の権利向上や社会進出の促進を進める必要があります。

コーヒー業界においては、女性が主役となって生産・流通するコーヒーをウーマンズ・コーヒーといった ブランドで販売する取り組み事例が見られます。 また、女性の社会進出を助けるために、子供の保育施 設の整備をすることで、幼児労働の防止にも役立つことが期待できます。女性が働いて稼いだ現金を、怠 け者の夫(失礼!)が浪費してしまわないように、女性が管理する共同貯金などを開設する事例もありま す。

このジェンダー平等実現の取り組みは、SDGs 策定以前からかなり広がっており、我が社が輸入するコーヒーの中にも、ウーマンズ・コーヒーと謳わずとも、女性が主導し生産・流通されているものが多くあります。

ルワンダ内戦の難民であった女性が成長し、母国で戦争被害者 の女性や孤児を受け入れる施設を経営する傍らに、コーヒー農 園のテコ入れ事業を手掛けている事例もあります。

また、コーヒー生豆の流通の現場のジェンダー平等を支える取り組みとしては、3の目標で触れたコーヒー麻袋の軽量化も有効かと思われます。



ルワンダで農作業をする女性たち

⑥ 安全な水とトイレを世界中に – すべての人々の水と衛生の利用可能 性と持続可能な管理を確保する

この目標には、人々の飲用水を確保するということ、水資源の保護、そして安全な水を利用した衛生の確保という側面があります。

飲用水の確保については、コーヒー生産国においては水道水の飲用の安全が 確保されている例は少なく、山間部などでは自然水を煮沸して利用したり、ボ



トル詰めされた水を買うのが一般的です。 コーヒー農園周辺に原生林などがある場合、それを水源涵養林として保護し、天然水を利用できるようにする取り組みが考えられます。 そのためには、不用意にコーヒー農園を拡大するために原生林を伐採せずとも生活ができるようにすることが必要で、ここでもコーヒー生産の効率化を図ることが有効になります。

地域の環境衛生を守るためには、 コーヒーの水洗工場における節水の取り組みと、排水の浄化が行われています。 この点についてはコスタリカが 1990 年代から、いち早く国の政策としての排水規制が行われ、水洗工場設備の近代化のパイオニアとなっています。

しかし、ここで忘れてはならないのは、コスタリカがそのような水洗工場の整備を進めないといけなくなったのは、同国の水洗設備が比較的規模の大きなものであったからです。コーヒーの水洗行程をごく小規模の単位で行うことができる零細農家は、その排水の量も少なく抑えることができ、周辺の環境に与える負荷を集中させないメリットがあります。

一つの事例として、メキシコのオアハカ州のコーヒー生産地では、零細農家の農園のある丘自体が自然のフィルターとして機能しており、それを通して山肌から湧き出る水が、近隣の地区の生活用水として利用されています。

⑦ エネルギーをみんなに、そしてクリーンに – すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な現代的エネルギーへのアクセスを確保する

この目標の実現のためには、主に2つの柱が想定されています。

その柱の一つである再生可能エネルギーの開発、利用については、再びコスタリカの先進性について触れることになります。 同国では、現時点でエネルギー需要のほぼ 100%を、水力、風力、地熱といった再生可能発電で賄っていま

す。また、コスタリカのコーヒー水洗工場では、排水処理に 伴って発生するメタンガスを工場稼働の燃料として利用す るなどの取り組み事例が見られます。

もう一つの柱としてエネルギー効率を高めることが期待されます。 コーヒー精選工場などの設備の省電力化などは、各企業のコスト削減のための取り組みが既になされていると思われますが、このような取り組みについては、日本の省エネ技術の輸出などが有効かと思われます。

また、山間部のコーヒー生産地などの地勢を利用した自然エネルギーの活用が期待されます。コーヒー生産地特有の傾斜地に流れる水力を利用した自家発電などは、筆者の過去の産地視察でも見かけたことがあります。 そのような自家発電設備を安価に提供し、コーヒーの精製や生活電力のために利用できるようにする取り組みの適地は少なくないと考えられます。

開発途上国では生活のためのエネルギーとして、未だに薪木が炊事に使われることが多いようです。わが社のウガンダの関係会社は、焚き木の熱源を有効に利用するための薪ストーブの設備をコーヒー農家に広める活動を行っています。

再生エネルギーの開発や利用については各国様々な取り組み

が行われていますが、日本のコーヒー業界での事例として、コーヒーかすをコークスに加工し焙煎に利用する技術が、産学共同研究で開発されたことが思い出されます。





コスタリカの排水浄化・利用設備



薪を効率的に利用するかまど

⑧ 働きがいも経済成長も - 包摂的かつ持続可能な経済成長およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働き甲斐のある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する

8 働きがいも 経済成長も

この目標には非常に重要な含意があると思われます。

ここで目指されているのは、あくまで持続可能な経済成長です。従来の科学技術や産業構造による経済成長では、温暖化ガスの排出の増加を伴うことは避け

られず、気候変動を止めるという目標の障害となります。持続可能な経済成長のためには、環境悪化との分断 (デカップリング) が必要要件になります。これを科学技術の向上だけに期待するのは楽観的に過ぎると考えます。ここで SDGs の存在自体が市民の行動様式や、生活の豊かさについての意識の変革を要請していると理解されるのです。

4の教育に関する目標に関して、コーヒー生産地の若者が都市部での他の職業に流出してしまうジレンマがあると述べました。山間部でのコーヒー生産に直接的、間接的に携わり続けるための生きがい、働きがいを感じるためにも、やはり意識の変革が求められていると考えます。

この根本的な意識改革は、一朝一夕の努力では達成できるものではありませんが、SDGs に取り組むすべての人が目指すべき目標であると考えます。

コーヒーの生産地の多くは、自然資源や文化の多様性の豊かな土地ですので、そこでの生きがい、働きがいの創出を目指す志をもつ人には、自然と持続可能な経済成長のためのアイディアが沸き起こってくると思います。 嗜好品であるコーヒーに、如何に付加価値と唯一無二の個性を生み出すのかという問いは、意識の高い若者にとっても非常にエキサイティングなものであるはずで、新しい世代のスペシャルティーコーヒーの生産者達による面白い取り組みを目にすることは日々頻繁になっています。その努力の結果としてのスペシャルティコーヒーを正当な対価で買い付けること自体、SDGs の目標に適った企業活動と言えます。

少し視点を変えると、労働人口の減少がみられる日本などでは単に時間や高い労働力を浪費するものと して敬遠されるコーヒー生豆を除去する作業などは、コーヒー生産地に移転することで、途端に一つの 付加価値の創出の一つとして評価される可能性があることも指摘したいと思います。

⑨ 産業と技術革新の基盤を作ろう – 強くしなやかなインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進およびイノベーションの推進を図る

この目標では、開発途上国の社会基盤としてのインフラの整備や、産業の多角 化、生産技術革新、情報通信技術の向上などが想定されています。

コーヒーの栽培の分野では、日本の農業の専門家の中に熱帯農業についての高度な知見や技術をもつ人があり、独立行政法人国際開発機構(JICA)などの事



業で、そのような専門家を派遣する取り組みが行われていることはよく知られています。古くからコーヒー生産に携わってきた零細農家の中には、伝統的な手法を盲目的に継承している場合もありますので、日本の農事専門家のように、世界の国々からの広い知見を得ることができる立場からの指導は貴重なものです。

また、コーヒー精製工場などへ向けて、日本の工業、環境保全技術などを輸出することが考えられます。 日本のコーヒー業界では、これまでコーヒー製品の品質向上や、コーヒー飲用の健康増進機能に関する研究などには積極的に投資されていますが、これからは、その原料の生産現場の技術革新などに投資する動きが出てきてほしいところです。

その際には、開発・導入された技術が当該国に於いて再生産され、また、独自の進化を遂げる余地を残すようなものでないといけないでしょう。 技術や知識が、私企業の利益追求のために独占されるのではなく、業界を横断して共有されるようにすることが SDGs の理念に即して期待されます。



自転車でのパルピング

イノベーションは、必ずしも高度な科学技術研究の産物ばかりではありません。 日本のある会社は、グアテマラで、自転車によるコーヒーチェリーのパルピングをする持続可能な生産工程を開発し、小規模ながらも脱炭素や節水にも貢献する循環型コーヒー生産に取り組んでいます。

⑩ 人や国の不平等をなくそう -各国内および各国間の不平等を是正する

この目標は、1の貧困をなくすという目標を、地域間や社会階層間の差異として捉えなおしたものと言えます。 コーヒー業界においては、生産国と消費国の経済格差、農園所有者と労働者との収入格差などの問題を挙げることができますが、その是正の取り組みは、個人や社会により問題意識の強弱や考え方の違いなどがあり、一筋縄では行かないものです。



経済的な不平等を問題とする場合、裕福な農園所有者、貧しい零細農家、中間搾取に長けた大企業企業といった紋切り型の理解のみに陥ることなく、事業毎の間接的なコストやリスク負担なども考慮に入れた利益配分の公正さなども検証することが必要と考えます。その検証や理解を促すためには、売買にかかわるコストの透明性を持つことが理想的です。コストの透明性という要件は、従来、企業の原料調達の際に無駄なコストを請求されないようにする、コスト圧縮の一つの手段としての側面が強かったと考えますが、今後は公正な利益配分について、買い手と売り手が双方向で透明性をもって理解するための方法として検討すべきだと考えます。これは、商売に関わる利益配分の考え方の変革が必要となりますので、直ぐに導入できるものではないかも知れません。しかし、世界の地域間の情報格差が以前よりは少なくなったのではないかと推測される時代において、情報格差をベースに利潤を得る古い商売の方法は、早晩、通用しなくなるのではないかと考えます。前項の技術や知識と同様に、ここでは、情報の共有をベースとする商売が主流になる時代が既に来ているのではないかと考えます。

① 住み続けられるまちづくりを - 包摂的で安全かつしなやかで持続可能な都市および人間居住を実現する

開発途上国の都市問題の多くが、貧困層の大都市への流入に伴って形成される スラムを舞台としていることを考えると、山間部での仕事や住環境を改善し、 人々が避難民化して都市部に流出しないようにすることが、一つの大きな改善 策となります。山間部の自然環境を破壊せずに、現金収入を稼ぐことができる



コーヒー生産は、打ってつけの手立てとなります。この点に焦点を当てた時には、世界のコーヒー生産者 人口の 95%までを占める中小・零細農家にターゲットを絞り、コーヒー農園経営の支援をすることが有 効です。

これまでも、コーヒーの零細農家に対する支援活動の事例はあまたにありますが、単なるコーヒーの木の栽培指導にとどまらず、コーヒー生産を事業経営として捉え、農園を生活環境の一部として捉えて、持続可能な循環系を維持していくような、全体を見据えた取り組みが必要になります。また若者たちが住み続ける魅力をもった地域社会の開発を心掛ける必要があります。

我が社 (ボルカフェ・グループ) は、そのような生産者支援のためのチームを世界 10 か国に配置し、日々コーヒー生産地の生産者グループと、持続可能なコーヒー農園経営の指導、協働をしています。

⑫ 作る責任使う責任 - 持続可能な消費と生産の形態を確保する

この目標は、資源の有効活用、廃棄物の削減、再利用などを行うことで、生産 と消費の持続可能性を確保するという骨子を持っています。

現在の人類の生活は、地球資源の再生能力の 1.69 倍に相当する資源を消費してなりたっているそうです。このままでは、早晩、地球の資源が枯渇することになります。この危機的な状況を変えるために、再生可能資源の活用や自然の循環機能を利用した経済や生活様式に移行していくことが必要になります。



消費市場においては、コーヒー製品の省資源化や、一杯用のドリップバッグなどがフードロスの観点からこの目標の達成に寄与していると思われます。 前述のコーヒーかすのコークスとしてのリサイクルも同様です。

コーヒー農園においては、農園を完全な循環系として整備した、いわゆるゼロ・エミッションを達成している先端的な農園の例もありますが、一般的には、コーヒー農園の副産物の堆肥等への加工・再利用や精製工場で排出される廃棄物の再利用、肥料の効率的な使用等を推奨することが有効で、生産指導をする際などは、重要な項目の一つとなります。

③ 気候変動に具体的な対策を - 気候変動およびその影響を軽減する ための緊急対策を講じる

SDGs の中でも、現在の危機的な状況が認識された、最も緊急性が高い重要目標であり、その中身は、他の目標とは一線を画し、具体的な対応を求める切迫した内容となっています。

二酸化炭素の増加が気候変動の主要因であるということについては、世界的に概ねの合意があるようですが、この問題についての日本国内における認知度は、必ずしも高くないようです。 また、わが国のエネルギー消費全体に占める再生エネルギーの割合は 17%(2018 年度)と、世界平均の 26%を大きく下回っています。

脱炭素のために、コーヒー業界としてできることは、少な くありません。 それは、冒頭に挙げた、長距離の原料輸 送のために化石燃料を大量に燃やしている業界としての 責任でもあります。

山間部の傾斜地などに住むコーヒー生産者が、異常気象により引き起こされる災害の被害者となるケースは少なくありませんので、コーヒーの商売を生業とする私たちには道義的な責任もあると考えます。

森林伐採は化石燃料消費に次ぐ二酸化炭素の増加原因と言われていますが、例えばペルーにおいては、近年の森林伐採の 25%がコーヒー農園開拓によるものだとの推計があります。コーヒーの木は多年生の植物で、それ自体が CO_2 を吸収する森林として機能するとも言えますが、シェードツリーを植えることで、二酸化炭素吸収量の増加や、気温上昇の低減の効果があります。面積当たりの生産量を上げるために、シェードツリーを排除し





シェードツリーのあるコーヒー農園



シェードツリーの無いコーヒー畑

たり、短期間で生産量のピークを迎えるハイブリッド品種を植えると、大量の肥料の使用が必要となることがあります。実は、コーヒー農園が発生する CO_2 の95%が肥料の生産と消費によるもとと推計されています。高生産量を追い求めるハイブリッド品種は、地球環境悪化の遠因にもなりうるということも認識する必要があります。

気候変動対策としての側面を考えると、シェードツリーを適宜配置し、肥料の消費のペースがゆっくりとした伝統品種(往々にしてカップ品質は良いですね)を、農園の生産効率などを最適化して栽培するというのが理想的な農園のありかたです。 この生産様式の変更により、生産量自体がさほど伸びないという事態も考えられます。このような事態に如何に対処していくのかという課題に取り組むには、やはりこれまでの商慣習や意識からの変革が必要となります。

コーヒー原料や製品の流通や保管における CO2削減の努力も必要です。リーファーコンテナーや定温倉

庫の使用の削減につながる品質保持性の高い包装の研究開発、多品種小ロット輸入の場合の共同輸送などが考えられます。このような取り組みは業界内外のパートナーシップを得て共同で進めることが求められます。

④ 海の豊かさを守ろう - 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全 し、持続可能な形で利用する

コーヒーと海の関係を考えるために、気仙沼のカキ養殖家が、その漁場近くに流れこむ川の上流域で植林活動をしていたことを思い出しましょう。コーヒー農園からの排水は、距離の長短はあれ、必ず海や湖に流れ込みます。前項6で紹介したコーヒーー水洗工場からの排水の浄化が、この目標に適っている事例として挙げられますが、ここでは、コーヒー農園が豊かな海の水の循環系にマ



ッチしている、ドミニカ共和国沿海部のバオルコ山地のコーヒー農園の事例を紹介したいと思います。 この生産地は、カリブ海を望む沿海部に位置し、海岸からせりあがる山肌を吹上がった湿気を含んだ海 風が雲となり、コーヒー農園を擁する山地に雨や夜露をもたらします。そして降り注いだ水分が地面に 吸収され、石灰岩の地層で浄化され、麓の山肌から驚くほどきれいな水となって湧き出しています。 この山地自体が自然のフィルターになっているわけです。湧き水は川となって海に注ぎ込むだけではなく、

水路を通って近隣の村落の生活用水として利用されています。

もともとこの産地では、肥料の消費がゆっくりとしたティピカ種がシェードツリーの下で栽培されており、土壌を肥料で汚染することなく、また、シェードツリーのおかげで、地崩れなどを防ぐことができていました。

この貴重な環境で生産されたコーヒーを、筆者は「海のコーヒー」として紹介していたことがありますが、残念ながら、度重なるハリケーンの被害を受け、近年生産量が減少傾向になっていることも、付け加えないといけません。



海からの風が雲を生む

⑤ 陸の豊かさを守ろう - 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。

コーヒーの栽培適地は、生物の多様性の豊かな土地と重なります。上質なアラビカ種の産地の多くが山岳地帯にありますが、この SDGs のターゲット項目の一つは、まさに、生物多様性を含む山地生態系の保全を確実にする、とされています。



このターゲットの達成には、アグロフォレストリーを意識した農園 管理や、農薬の適正な使用、コーヒー農園の新規開拓のための原生 林の伐採の防止などへの取り組みが必要になります。原生林の伐採 は多くの国で法律上禁止されているようですが、経済発展を優先課 題としている開発途上国などで、現金収入を稼ぐためのコーヒー農 園が原生林を侵食する形で開拓されていないかに注意をする必要 があります。

シェードツリーを配し、適正な農薬使用に配慮した農園は、周辺の 生態系と共存するのみならず、農園内にも豊かな動物相を育むこと ができます。

我が社では、コーヒー生産地内や周辺に棲息する野生動物の保護活動を支援し、保護対象とする動物をアイコンとして商品ブランドの一部とすることで、消費者がコーヒー生産と生物多様性の関係につ



メキシコの農園に棲むアルマジロ

いて関心を持つきっかけとなることを目指しています。コーヒー生産地域近くに棲息する大型野生動物としては、中米のジャガーなどのネコ科動物、インドやインドネシア・スマトラの虎、中央アフリカのチンパンジーやゴリラなどが挙げられますが、その多くが絶滅危惧種に指定されていますので、その保護活動に対するコーヒー業界からの支援は貴重なものになります。

⑩ 平和と公正をすべての人に – 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。

SDGs の中でひときわ政治的な色合いをもつ目標であり、達成に政府機関の強い関与が必要になる項目です。 そのために、SDGs として採択することが国連の協議でもっとも紛糾したものの一つだそうです。採択に途上国の多くが懸



念を示すなかで、採択に強い意欲を示したのは、激しい騒乱状態を経て 2002 年に独立を果たしたばかりの東チモールだったそうです。現在東チモールではコーヒー生産が外貨収入の大きな柱として、生まれて間もない同国の平和の維持に寄与しています。

ことほど左様に、コーヒーは平和をもたらす力を持っています。

コーヒー生産が平和の獲得、維持のために貢献している 事例は世界中に事欠きません。

不幸な事件からの復興を目指してきたルワンダで、貴重な外貨獲得のための作物として、外国からの援助も取り込みながら平和維持に寄与している例、南米で生産されるコカや、イエメンを中心に栽培され覚醒作用のあるカートなどの代替作物になっている例などは、コーヒーの平和維持の役割が大きいことを思い出させてくれます。



コーヒーに植え替えられたカート畑

開発途上国におけるコーヒー生産者支援に積極的な某国の援助の裏には、山岳地帯でのテロ組織の組成を防止する意図があるとも言われています。

ここで、コーヒー生産の平和維持への貢献が期待される舞台として注目すべきコンゴ民主共和国の例を紹介したいと思います。アフリカ大陸のほぼ中央部に位置する同国は、非常に豊かな自然を擁していますが、皮肉にも「平和以外になんでもある国」と呼ばれています。1885年のベルギー王による植民地化以降、これまで世界でも最悪の人道危機を引き起こし続けてきた様々な紛争の原因の一つは、同国東部の北キブ州を中心に埋蔵されている豊富な地下資源を巡る権益争いです。 その権益を狙う(日本を含む)先進国の直接的、間接的な関与に、国内や周辺国との民族間紛争や政争が絡み合い、最悪の人道危機の解決の目途はいまだに立っていません。



ローランドゴリラの親子 (ビルンガ国立公園提供)

コンゴは、携帯電話やPC、ゲーム機などに使われるレアメタルであるコルタンの埋蔵量の80%を占めるという説がありますが、その鉱山では露天の手堀りでの採掘が行なわれ、壊滅的な自然破壊や児童労働の問題が発生しています。 そして、ほとんど知られていませんが、この地方はアフリカでも最高のコーヒーを生み出すテロワールでもあるのです。植民地時代にベルギーにより持ち込まれた古い品種のコーヒーが、中央アフリカ独特の赤土の土壌で生み出すアラビカコーヒーは、世界でも最高レベルの品質のものです。そして現在、環境にやさしく、多額の投資を必要としないコーヒー栽培をすることで、農家の人々が困窮状態から抜け出すことができるような支援活動が行われています。この活動は、やはり地下資源開発の影響で絶滅に瀕するローランドゴリラの保護を行っているビルンガ国立公園や欧米のNGOなどがパートナーシップを組んで進められています。

この目標の達成に少しでも寄与するためには、生産者に平和をもたらす力のあるコーヒーを適正な価格で購入し、味わい、生産や流通にかかわる人々の置かれた状況に関心をもつところから始めることができるでしょう。

⑦ パートナーシップで目標を達成しよう – 持続可能な開発のための 実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

これは SDGs の最後を飾るに値する、重要な理念の表明です。

これまでの16のSDGs を見て気づくことは、全てのSDGs は繋がっているということです。その繋がりは、例えばある商品の生産から消費にそったタテの繋がりであり、地域間を広くカバーするヨコの繋がりでもあります。そのよう



な繋がりをもった SDGs のための取り組みを有効にするためには、必然的に広いパートナーシップが必要になります。

異業種間の協力、産官学の共同研究、さらには、同業者間の競争関係を越えた協力体制が期待されます。

筆者の仕事であるコーヒー生豆の貿易に関わる取り組みにおいては、運輸会社、倉庫会社、包装資材メーカーなどの流通保管に関わる分野や、コーヒーの品質の研究の分野、さらには生産者に対するマイクロファイナンスなどを可能にする金融機関とのパートナーシップが期待されます。

SDGs に寄与する新しい技術や資材などを、自社の利益追求だけのために独占するのではなく、同業者と共有し、新奇性の高い技術や資材を汎用性のある基盤に乗せることで、業界全体の最適化を図るようにすることが理想的です。公共性の高い事業、技術、商品の商権を独占するようなことは、本来の目的との自己矛盾を引き起こすことになると考えます。サステイナブル認証コーヒーの専売権を特定の私企業に与えているケースがありますが、それは事業目的が単なる利益の追求であることの証左に見えます。

このような理想論を現実のものとするためには、やはり思い切った意識変革が必要なのかも知れません。